

母親に対する甘えが大学生の精神的自立に及ぼす影響

緒方南奈¹⁾・徳田智代²⁾・原口雅浩²⁾

要 約

本研究では、母親に対する甘えが大学生の精神的自立に及ぼす影響について、母親の養育態度を踏まえて検討する。研究1では、大学生と大学院生89名を対象に質問紙調査を行った。その結果、現在の「相互依存的甘え」は精神的自立の「適切な対人関係」にプラスの影響を及ぼし、現在の「屈折した甘え」は、精神的自立の「価値判断・実行」にマイナスの影響を及ぼしていた。特に、母親に対して素直に甘えを表現し、うらみすねみといった気持ちを持たない人は、精神的自立ができることが分かった。また、母親の過保護な養育態度は、精神的自立にマイナスの影響を及ぼしていた。研究2では、大学生と大学院生108名を対象に、甘えと精神的自立について自由記述式の質問紙調査を行った。その結果、子どもの甘えに対して、母親が一貫して子どもの甘えを受け入れる態度をとることが、「自立できる甘え」として重要であることが示唆された。

キーワード：母親に対する甘え、精神的自立、母親の養育態度

近年、引きこもりやニートといった大人になれない若者が増えていることが指摘されている（山田・宮下, 2007）。子供・若者白書（内閣府, 2015）によると、平成26年時の30歳未満の人口3512万人に対し、若者無業者、いわゆるニートは56万人で人口の2.1%を占めている。さらに、若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）（内閣府, 2010）によると、広義のひきこもりは69.6万人存在すると言われている。次世代を担う若者のこのような問題は、働き手の不足にもつながるため、大きな社会問題となっている。

ひきこもりやニート増加の心理的背景として、青年期の自立との関連が指摘されている（斎藤, 2003）。Havighurst (1953, 荘司訳 1995) は、自立の獲得は青年期における重要な発達課題の一つであると述べている。特に大学生は、自己決定や行動のあり方といった心理的な面において、より自立した状態を求められる時期である（山田・宮下, 2010）。

高坂・戸田 (2003) は、青年期における心理的自立を「青年期において適応するために必要な心理・社会

的な能力を有した状態」と定義し、行動、価値、情緒、認知の4側面に分類している。行動的自立とは「自らの意思で決定した行動を自分の力でやり、その結果の責任を取ることができるようになること」、価値的自立とは「行動・思考の指針となる価値基準を明確に持ち、それに従って物事の善悪、行動の方針などの判断を下すことができるようになること」、情緒的自立とは「他者との心の交流をもつとともに、感情のコントロールができ、常に心の安定を保つことができるようになること」、認知的自立とは「現在の自分をありのままに認めるとともに、他者の行動、思考、立場および外的事象を客観的に理解・把握することができるようになること」である。

大学生の精神的自立に影響を与える要因として、両親の養育態度（高富・桂田, 2011）や母子間の甘え・甘やかし（長, 2002）、家族機能（高坂・戸田, 2005）等、親子関係が多く取り上げられている。近年、共働き世帯の増加や女性の社会進出など、働く女性が増えてきているが、現在に至っても子育ての多くを母親

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

が担っているのが現状である（窪田，2000）。篠原・原崎（2004）でも、子育ての中心は母親であったと感じている人が多いことが示されている。これらのことから、特に関わりが多い母親との関係に焦点を当てて研究を行う必要があると考えられる。

土居（2001）は、甘えを「対人関係において、相手の好意をあてにして振舞うこと」と定義し、子どもの頃の母子間での甘え経験が自立にとって重要であると述べている。また、土居（2001）のいう甘えには、「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」がある。健康で素直な甘えとは、相手との相互的な信頼を軸にした甘えであり、屈折した甘えとは、一方的な要求の形をとった自己愛的な甘えである。斎藤（2003）は、日本人にとって望ましい親子関係は、互いに甘え、甘やかす関係であり、甘え上手になることが日本人にとっての自立モデルであると述べ、これを「親孝行モデル」と呼んでいる。さらに角野（2002）は、自立するためには、子どもからの自立するための甘えと、親からの自立させるための甘やかしの両面が必要であると述べている。子どもの心理的自立を促すためには、親の自信ある養育態度が重要であり（高富・桂田，2011）、過保護や過度な甘やかしのよう行き過ぎた母親の養育行動が、子どもの積極性や自立性にマイナスの影響を及ぼす（戸田，2006）。一方、幼少期に両親から大切に育てられた人は、屈折した甘えの傾向が低い（篠原・原崎，2004）。

これらのことから、母親に対して「健康で素直な甘え」を表現すること、さらに子どもの甘えに対する母親の適切な甘やかしが、精神的自立に影響していると考えられる。

精神的回復力（レジリエンス）とは、「困難な状況において苦痛を感じながらも、その後の適応的な回復を導く心理的な特性」（小塩・中谷・金子・長嶺，2002）である。橋本・荒木（2011）は、レジリエンスが高いと、自立も高く、両親との関係や友人関係も親

和的になることを示している。また葛西・藤井（2013）は、レジリエンス形成に影響を与える要因として両親の養育態度を取り上げ、両親の受容・支持的対応やほめるしつけが子どものレジリエンスに影響していることを示している。これらのことから、精神的自立に影響を及ぼす要因として精神的回復力についても検討を行う。その際、母親の養育態度や母親に対する甘えと精神的回復力の関係についても検討する。

以上のことを踏まえ、本研究では母子関係に注目し、母親に対する甘えが大学生の精神的自立に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。さらに、精神的自立への影響要因として、母親の養育態度と精神的回復力も含め検討する。その際、影響要因間の関連についても明らかにする。

研究1. 母親の養育態度，母親に対する甘え，精神的回復力，精神的自立との関連

目的

過去に母親から受けた養育態度と母親に対する甘え、現在の母親に対する甘えと精神的回復力および精神的自立の関連について検討する。本研究では、図1のような影響関係があるという仮説を立てた。

方法

調査協力者

大学生と大学院生89名（男性28名，女性61名）を対象に調査を行った。平均年齢は20.6歳（SD = 1.95）であった。

手続き

調査は質問紙法によって行った。講義中に一斉に配布・回収を行った。

質問紙の構成

フェイスシート 性別，年齢，学年，現在の住まい（実家，1人暮らし，寮・下宿，その他），幼少期から16歳までの家族構成，幼少期から16歳までの母親の職

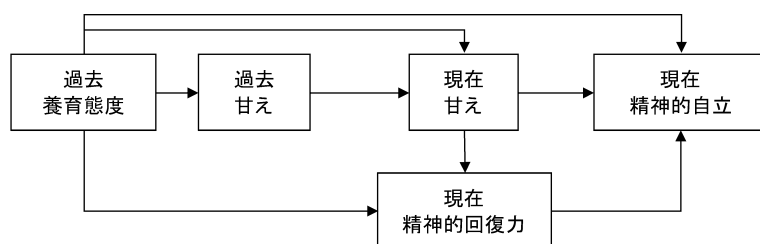


図1. 甘えと精神的自立の影響関係

業（会社員、自営業、専門職、公務員、専業主婦、パート・アルバイト、その他）を尋ねた。

Parental Bonding Instrument (PBI) 日本語版 Parker, G., Tupling, H., & Brown, L.B. (1979) が作成した尺度を小川 (1991) が日本語訳したものをを用いた。養護に関する13項目、過保護に関する12項目の2因子25項目からなる。これらについて、「非常にそうだ」から「全く違う」までの4件法で回答を求めた。

多面的「甘え」尺度 玉瀬・相原 (2004) が作成した尺度を用いた。甘え希求に関する4項目、甘え受容に関する4項目、甘え歪曲に関する4項目、甘え拒絶に関する5項目の4因子18項目からなる。また、甘え希求と甘え受容を合わせて相互依存的甘えとし、甘え歪曲と甘え拒絶を合わせて屈折した甘えとしている。本研究では、各項目の対象となる人物を全て「母」に変更して使用した。その際、甘え受容因子の「友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは、自分が相談にのってあげたい」という項目は、本調査には不適切と判断し、削除した。これらについて、「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4件法で回答を求めた。

精神的回復力尺度 小塩・中谷・金子・長嶺 (2002) が作成した尺度を使用した。新奇性追求に関する7項目、感情調整に関する9項目、肯定的な未来志向に関する5項目の3因子21項目からなる。「はい」から「いいえ」までの5件法で回答を求めた。

心理的自立尺度 高坂・戸田 (2006) が作成した尺度を用いた。価値判断・実行に関する7項目、自己統制・客観視に関する7項目、現在把握・将来思考に関する5項目、適切な対人関係に関する5項目、社会的知識・視野に関する5項目の5因子29項目からなる。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの7件法で回答を求めた。

結果

1. 調査協力者の属性

表1は、本研究の調査協力者の属性をまとめたものである。現在の住まいは、実家と一人暮らしがほぼ同数であった。幼少期の家族構成に関しては、二世帯同居が8割を占めていた。幼少期から16歳までの母親の仕事に関しては、仕事をしていた人が7割を占めていた。

表1. 調査協力者の属性

| 性別 | 住まい | | 家族構成 | | 母親の仕事 | | |
|----|-----|-------|------|-----|-------|---|----|
| 男性 | 61 | 実家 | 44 | 二世帯 | 70 | 有 | 61 |
| 女性 | 28 | 一人暮らし | 42 | 三世帯 | 19 | 無 | 28 |
| | | その他 | 3 | | | | |

2. 精神的自立モデルの検討

精神的自立モデルについて検討するために、パス解析を行った。図2は、相互依存的甘えと精神的自立の影響関係である。GFI = .99, AGFI = .94, CFI = 1.00, と高い適合度が得られた。パス係数については、過去の相互依存的甘えから現在の相互依存的甘え、過保護から適切な対人関係のそれぞれのパス係数は .76と -.43, 現在の相互依存的甘えから適切な対人関係のパス係数は .24で有意であった。過保護から過去の相互依存的甘えおよび現在の相互依存的甘えと感情調整, 現在の相互依存的甘えから感情調整, 感情調整から適切な対人関係のそれぞれのパス係数は有意でなかった。図3は、屈折した甘えと精神的自立の影響関係である。GFI = .99, AGFI = .95, CFI = 1.00, と高い適合度が得られた。パス係数については、養護から過去の屈折した甘え、過去の屈折した甘えから現在の屈折した甘え、現在の屈折した甘えから価値判断・実行のそれぞれのパス係数が -.43, .71, -.39, 養護から新奇性追求のパス係数が .26で有意であった。養護から

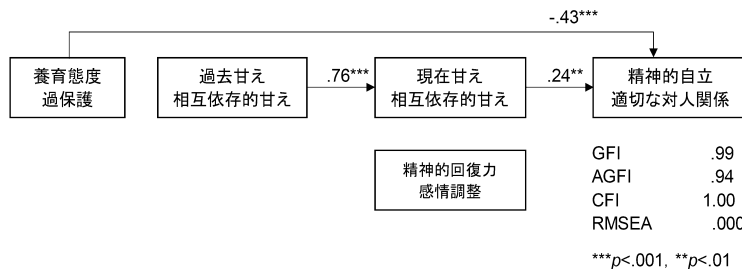


図2. 相互依存的甘えと精神的自立の影響関係

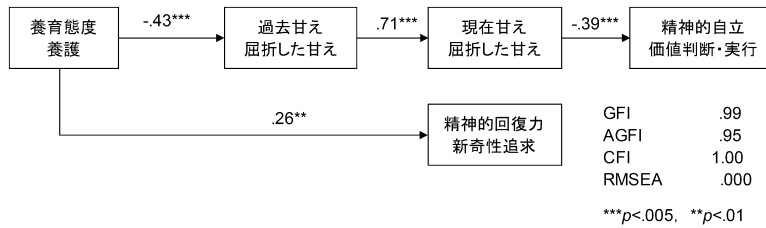


図3. 屈折した甘えと精神的自立の影響関係

現在の屈折した甘えと価値判断・実行、現在の屈折した甘えから新奇性追求、新奇性追求から価値判断・実行のそれぞれのパス係数は有意でなかった。

3. 甘えと精神的自立についての検討

甘え希求、甘え歪曲の得点を用いて K-Means 法によるクラスター分析を行った。その結果、4 クラスターに分類された。表 2 は、各クラスターの平均と標準偏差である。第 1 クラスターは、甘え希求と甘え歪曲がともに低かったため、LL とした。第 2 クラスターは、甘え希求と甘え歪曲がともに高かったため、HH とした。第 3 クラスターは、甘え希求は高く甘え歪曲が低かったため、HL とした。第 4 クラスターは、甘え希求と甘え歪曲が平均であったため、MM とした。

次に、クラスター間の精神的自立の差を検討するため分散分析を行った。その結果、クラスター間の精神的自立に有意傾向が見られた ($F_{(3,85)} = 2.62, p < .10$)。Tukey の HSD 法の結果、HL は MM よりも精神的自立が高かった ($MSe = 425.5, 5\%$ 水準)。

表 2. 各クラスターの平均と標準偏差

| クラスター | 甘え希求 | | 甘え歪曲 | |
|-------|------|------|------|------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD |
| LL | 7.3 | 1.80 | 5.2 | 1.17 |
| HH | 11.8 | 1.81 | 13.1 | 1.52 |
| HL | 11.4 | 1.56 | 7.1 | 1.36 |
| MM | 8.9 | 2.21 | 9.4 | 1.07 |

考 察

母親に対する甘えと精神的自立の影響関係から、母親の養護的な養育態度が、母親に対する屈折した甘えに負の影響を及ぼしていることが分かった。篠原・原崎 (2004) は、両親の中でも幼少期の関わりは母親が主であったこと、幼少期に親から大切に育てられた子どもは屈折した甘えが低減することを示している。このことから、幼少期に母親から大切に育てられた子どもは、母親からの愛情に十分満足した結果、母親に対

してうらみすねみといった歪曲した甘えを感じなくなると考えられる。さらに、母親からの愛情を感じているということは、母親との信頼関係が十分構築されていると考えられるため、母親からの甘えも受け入れられるのではないかと考えられる。

一方、過保護的な養育態度は相互依存的な甘えに影響を及ぼさず、直接精神的自立に影響を及ぼす結果となった。戸田 (2006) は、過保護や過度な甘やかしのよう行き過ぎた母親の養育行動が、子どもの積極性や自立性にマイナスの影響を及ぼすことを示唆している。本結果は、戸田 (2006) の結果を支持するものであると考えられる。これらの結果から、母親の養育態度の中でも、甘えに影響を及ぼしているのは養護的な養育態度であることが示唆された。

甘えと精神的自立に関しては、相互依存的な甘えは適切な対人関係に正の影響を、屈折した甘えは価値判断・実行に負の影響を及ぼしていることが分かった。また、甘えの中でも、母親に対して素直に甘えることができ、うらみすねみといった気持ちを感じていない人は、精神的自立が高まることが分かった。長 (2002) の研究では、甘えが高く甘やかしが低い群は、依存欲求と独立欲求の差が小さく、最も自立していた。このことから、精神的自立には、健康的な甘え、特に素直に甘えを表現できることが重要であると考えられる。

斎藤 (2003) は日本人の自立モデルは親孝行モデルであり、甘え上手になることが重要であると述べている。親孝行モデルは、子どもから甘えること、甘えに対して親が甘やかすことで成り立つ。また、角野 (2002) は、自立するためには、子どもからの自立するための甘えと、親からの自立させるための甘やかしの両面が必要であると述べている。

研究 1 では、母親に対する甘えについて検討しているが、母親からの甘やかしについての検討は行っていない。精神的自立をするためには、子どもの甘えに対する母親の対応について明らかにすることが必要だ

う。そのため、研究2では、甘えに対する母親の対応も含めて、甘えと精神的自立との関連について検討する。

研究2 甘えと精神的自立の関連

目的

母親に対する甘えと甘えに対する母親の対応、精神的自立の関係について検討する。

方法

調査協力者

大学生と大学院生108名（男性34名，女性74名）を対象に調査を行った。平均年齢は19.9歳（SD = 1.06）であった。

手続き

調査は質問紙法によって行った。講義中に一斉に配布・回収を行った。

質問紙の構成

フェイスシート 性別，年齢，学年を尋ねた。

多面的「甘え」尺度 研究1で使用した尺度のうち、本研究では、甘え希求に関する4項目，甘え歪曲に関する4項目の2因子8項目を尋ねた。

幼少期から小学生まで・中学生・高校生・現在における甘え それぞれの時期における甘えの有無について3件法で回答を求めた。甘えがあった人に関しては、甘えの具体的なエピソード，甘えに対する母親の対応とそのときの気持ちについて自由記述による回答を求めた。

精神的自立・甘えと精神的自立の関係 精神的自立をしていると思うか，甘えと精神的自立は関係があると思うかについて3件法で回答を求め，その理由について自由記述による回答を求めた。

結果

1. 母親に対する甘えと精神的自立との関連

母親に対する甘えと精神的自立との関係を明らかにするため，精神的自立を目的変数，母親に対する甘えと甘え歪曲を説明変数とする順序ロジスティック回帰分析を行った。その結果，モデル式は有意傾向であったが（ $\chi^2_{(2)} = 5.51, p = 0.064$ ），説明率は0.02と低かった。次に回帰係数の検定を行ったところ，甘え歪曲は有意であったが（ $\chi^2_{(1)} = 4.31, p = 0.038$ ），甘え希求は有意でなかった（ $\chi^2_{(1)} = 0.01, p = 0.931$ ）。予測プロファイルを図4に示す。図4から，甘え歪曲が高いと精神的自立ができず，甘え歪曲が低いと精神的自立をするということが読み取れた。

2. 甘えが精神的自立に及ぼす影響と理由の検討

甘え希求，甘え歪曲の得点を用いてK-Means法によるクラスター分析を行った。その結果，4クラスターに分類された。表3は，各クラスターの平均と標準偏差である。第1クラスターは，甘え希求と甘え歪曲が平均であったため，MMとした。第2クラスターは，甘え希求が低く甘え歪曲が高かったため，LHとした。第3クラスターは，甘え希求と甘え歪曲がともに低かったため，LLとした。第4クラスターは，甘え希求と甘え歪曲がともに高かったため，HHとした。

次に，精神的自立とクラスターについて対応分析を行った。カテゴリスコアを図5に示す。その結果，LLパターンは精神的自立をしていると知っていること，MM，HHパターンは精神的自立をしていないと

表3. 各クラスターの平均と標準偏差

| クラスター | 甘え希求 | | 甘え歪曲 | |
|-------|------|------|------|------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD |
| MM | 9.9 | 1.28 | 9.2 | 1.42 |
| LH | 7.6 | 1.25 | 10.8 | 2.31 |
| LL | 7.3 | 0.80 | 5.6 | 1.33 |
| HH | 14.0 | 1.33 | 12.0 | 1.33 |

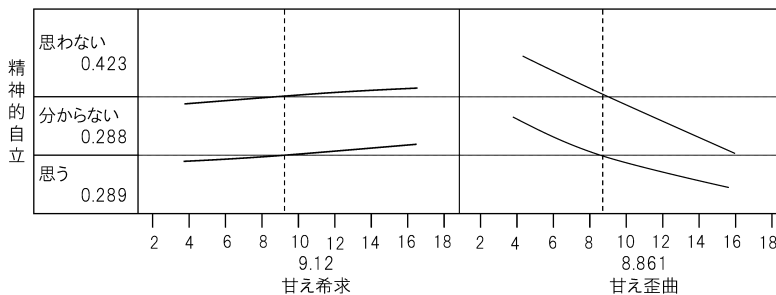


図4. 予測プロファイル

思っていること、LHパターンはどれにも分類されないことが示された。

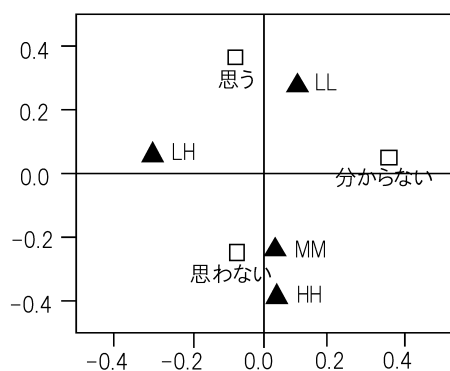


図5. カテゴリースコア

研究1では、精神的に自立していたのはHLであったが、研究2の対応分析では、LLが精神的に自立していると思っており、異なる結果が得られた。そこで、LLが精神的に自立していると思う理由を明らかにするため、自由記述の内容を調べた。精神的自立をしていると思っている理由として、「一人暮らしをしているから」や「甘えていない」、「親に頼らず自分でできている」といった内容が多く見られた。また、甘え希求が低い理由について、母親の子どもの甘えに対する対応を検討した。その結果、母親は受容的な対応をする一方、子どもの甘えに対して「しぶしぶしてくれた」や「先回りした対応だった」といったように、子どもが望んでいないような対応をしていることもあり、対応の一貫性がなかった。

考察

順序ロジスティック回帰分析の結果は、うらみすねみがないと精神的自立をするという研究1の結果は支持するものの、素直に甘えることで精神的自立をするという点に関して異なる結果も見られた。この原因として、精神的自立の測定方法の違いが考えられる。研究1では心理的自立尺度を用いて測定したが、研究2では直接的に精神的自立について尋ねている。一般的に、日常的に用いる「甘え」という言葉はあまり好ましくない状態を示すことが多く(土居, 1998), 「甘えていることは自立できていないこと」といった考えもあるのだろう。実際、精神的自立ができていない理由として、「一人暮らしをしているから」や「親に頼らずに自分で何でも決めている」、「一人で決断できる」

といった内容が多く見られた。一人でやっている、つまり「甘えていないから自立できている」といった考え方が回答に影響したことが考えられる。

対応分析や自由記述の結果から、甘えに対する母親の対応が精神的自立に影響していることが示唆された。精神的自立をしていると思っている人は、過去に素直に甘えても望ましい対応をされなかった結果、次第に自分で行動するようになり、「甘えていないから自立できている」といった考え方が回答に影響したと考えられる。精神的自立をしていないと思っている人は、母親の対応が一貫しないため、母親に対してうらみすねみがある一方、次は甘やかしてくれるのではないかといった希望も捨てられずに甘える気持ちもあることから、精神的自立ができていないという評価をしているのではないかと考えられる。

本研究の結果、母親に対して素直に甘えを表現すること、母親に対してうらみすねみをもたないこと、母親が子どもの甘えを一貫して受容することが精神的自立をする上で重要であることが示唆された。前述の通り、ひきこもりやニート人口は増加しており、自立への支援は非常に重要である。青年期の自立支援を考える際、また彼らの母親に対して心理教育を行う際に、甘えという視点を取り入れることを始め、本研究の知見を活かすことができると考える。

引用文献

- 長 憲枝 (2002). 母子間の「甘え」「甘やかし」と青年期の自立. 日本青年心理学会大会発表論文集, 10, 26-27.
- 土居健郎 (1998). 「甘え」と「妬み」. 児童心理 5月号. 特集・甘やかされている子. 金子書房.
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造. 弘文堂.
- 橋本泰子・荒木みさこ (2011). 大学生の自立性とレジリエンスに関する研究—レジリエンス尺度・自立性—依存性尺度・SCT・バウムテスト—. 桜美林論考. 心理・教育学研究, 2, 13-20.
- Havighurst, Robert J. (1953). *Human Development and Education*. (ハーヴィーガースト, ロバート J. 荘司雅子 (監訳) (1995). 人間の発達課題と教育 玉川大学出版部)
- 角野善宏 (2002). 自立のための「甘え」・自立を妨げる「甘え」. 児童心理 3月号. 金子書房.
- 葛西真記子・藤井美沙子 (2013). レジリエンスの形成過程—回想された両親像に注目して—. 鳴門教育大学研究紀要, 28, 295-306.

- 高坂康雅・戸田弘二 (2003). 青年期における心理的自立 (I) - 「心理的自立」概念の検討-. 北海道教育大学付属教育実践総合センター紀要, 4, 135-144.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立 (II) - 心理的自立尺度の作成-. 北海道教育大学付属教育実践総合センター紀要, 56(2), 17-30.
- 窪田容子 (2000). 母親と息子の関係-フェミニズムの視点から. 女性ライフサイクル研究, 10, 47-60.
- 内閣府 (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査). 共生社会政策統括官青少年育成, http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_gaiyo_index.html (2016年1月15日.)
- 内閣府 (2015). 平成27年度版子ども・若者白書, http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/b1_04_02.html (2016年1月15日.)
- 小川雅美 (1991). PBI(Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. 精神科治療, 6, 1193-1201.
- 小塩真司・中谷泰行・金子一史・長嶺信治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性-精神的回復力尺度の作成-. カウンセリング研究, 35, 57-65.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). *A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology, 52*, 1-10.
- 斎藤 環 (2003). ひきこもり文化論. 紀伊国屋書店.
- 篠原しのぶ・原崎聖子 (2004). 青年の甘えの背景に関する調査研究. 福岡女学院大学大学院紀要, 1, 9-20.
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2004). 相互依存の甘えと自己愛的傾向. 奈良教育大学紀要, 54(1), 49-61.
- 高富莉那・桂田恵美子 (2011). 大学生の心理的自立と親の養育態度との関連. 臨床教育心理学研究, 37, 27-32.
- 戸田須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関連について. 北海道教育大学釧路分校研究報告, 38, 59-69.
- 山田裕子・宮下一博 (2007). 青年の自立と適応に関する研究: これまでの流れと今後の展望. 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 7-12.
- 山田裕子・宮下一博 (2010). 大学生の心理的自立に影響する要因に関するパイロット研究-半構造化面接による検討-. 千葉大学教育学部研究紀要, 58, 9-14.

The Effects of Amae on University Students' Psychological Independence

NANA OGATA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

TOMOYO TOKUDA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

MASAHIRO HARAGUCHI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study will examine how university students' Amae toward their mothers affect their psychological independence, based on the mothers' bonding. In Study 1, a questionnaire survey was administered to 89 undergraduate and graduate school students. As a result, we found that current "mutually-dependent Amae" has a positive effect on the "appropriate interpersonal relationships" factor of psychological independence. However, "distorted Amae" was found to have a negative effect on the "value judgment and execution" factor of psychological independence. In particular, people who honestly express Amae toward their mother without feelings of resentment or peevishness are able to be psychologically independent. In addition, overprotective bonding by the mother was found to have a negative effect on psychological independence. In Study 2, an open-ended questionnaire survey on Amae and psychological independence was administered to 108 undergraduate and graduate school students. The results suggested that it is critical for mothers to provide a consistent positive response to their child's Amae for the child to develop "independent Amae."

Key words: Amae toward their mothers, Psychological Independence, Bonding by the mother